

高橋・名瀬病院医師 内科の診療体制拡充に本腰 東京から家族と奄美大島へ移住

名瀬徳洲会病院（鹿児島県）は新年度に入り内科の診療体制を強化した。新たに高橋大悟医師が加わり、常勤医が3人から4人となった。高橋医師は、今まで主に都内で活動していたが、離島医療への関心や子育て環境を理由に、同院への入職を希望。家族とともに奄美大島に移住した。専門医資格を生かし、島の医療充実に意欲を見せている。

高橋医師は循環器を専門とし、2015年の大学卒業後、主に都内の大学病院で活動。循環器領域のなかでも、とくに体に負担をかけない診断・治療分野を手がけ、大学院で心臓の画像診断に関する研究を行った経歴ももつ。出身も東京都で、奄美大島を訪れたことはなかったが、離島医療に対する関心と子育ての環境を考え、名瀬病院で働くことを決意、今年4月1日に入職した。

「親族に北海道の礼文島で医療を提供する医師がいて、以前、



「話すことが好きなので、島の皆さんは気軽に相談してほしいです」と高橋医師

旅行を兼ねて会う機会がありました。すべての患者さんを診なければならず、すごく努力している姿が印象的で、思い描く医師の理想像でした。その時に離島医療に興味をもちました。3

人の子ども（いずれも未就学児）を伸び伸びした環境で育てたいと考えていたこともあり、妻と相談し、移住することになりました」（高橋医師）

現在は、取得している総合内科専門医の資格なども生かしながら、内科中心に外来や入院の患者さんに対応。時には患者さん宅を訪れるなど、在宅医療も行う。また、隔週で島内の笠利病院でも診療している。高橋医師は「体に負担の少ない心臓CT（コンピュータ断層撮影）や心臓MRI（磁気共鳴画像診断）を当院でも実施しているので、得意分野を生かしつつ、経験を重ねていきたいです。徳洲会は診療科や地域、国を超えて人材交流を図るイメージがあるので、いろいろな方と接点をもって幅広く活動していきたいです」と前向きだ。

島の生活についても、「私自身、大変気に入っています」と吐露。「子どもも海が好きで、伸び伸び生活できていると思います。大家族も珍しくなく、島の皆が助け合っている雰囲気が好き。

東京西病院

「スマートベッド」を追加導入
寝たきりにしない看護DX加速

東京西徳洲会病院は、4階南・北病棟（96床）にスマートベッドシステムを導入した。2023年8月に導入した3階南・北病棟（99床）と合わせ計195床と、全病床の4割以上に拡大した。同システムは患者情報やADL（日常生活動作）、食事指示、転倒・転落リスクなどをピクトグラム（図記号）でモニター表示。電子カルテと連動した最新データがリアルタイムで反映される。

菅原隆広・副看護部長は「患者さん一人ひとりのADLに応じ、秒単位で離床アラートを設定でき、転倒・転落予防や離院防止に貢献しています」と説明。大久保哲実・看護副主任は「ワンタッチでバイタルサインを早期警告スコア（NEWS）に連動できるなど、看護業務の効率化になっています。患者さんに、より手厚いケアを提供していきたい」と抱負を語る。

今回導入した4階南・北病棟は脳神経外科などのICU（集中治療室）を経由する患者さんが多く、急変リスクが高い。リアルタイムの情報共有で多職種連携を強化し、早期離床につなげたい構えだ。佐々木悦子・看護部長は「働きやすさの改善はもちろん、看護師がベッドサイドにいる時間を増やすことや、患者さんを寝たきりにしない看護を実践するために、DX（デジタル変革）を活用していきたい」と積極的。

同院はインカム（無線機）の運用も開始。都の補助金を活用し、今後も看護師の負担が大きい病棟から順次DX化していく方針。



「患者さんを寝たきりにしない看護を」と（左から）菅原・副看護部長、佐々木・看護部長、大久保副主任



モニターで患者さんの様子を確認し、すぐにベッドサイドに行ける仕組み

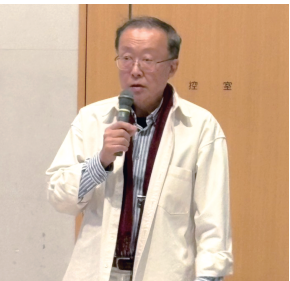
教育面も、今通っている幼稚園の先生方が本当によく面倒を見

てくださり、安心できます」と笑顔を見せる。

湘南鎌倉病院から講師を招き 「地域救急最適化」で講演会

庄内余目病院

庄内余目病院（山形県）は4月22日、地元のホールで「機能分担による地域救急の最適化」をテーマに講演会を開催した。湘南鎌倉総合病院（神奈川県）から山上浩・副院長兼救命救急センター長と内田悠太・救急調整室室長（救急救命士）を講師として招き、庄内地域の消防関係者や医療従事者ら71人



「庄内地域の救急を皆で考える機会に」と寺田院長が開会の挨拶



質疑応答で医師と病院救命士の立場から回答をする山上副院長（右）と内田室長

が参加した。

冒頭、寺田康院長が「救急の現場は、患者さんを病院に搬送して終わりではないことを知ってほしい。湘南鎌倉病院の機能分担の良いところを取り入れて、

庄内地域に還元したい」と開催趣旨を説明。

第一演題では山上副院長が「地域でデザインする救急医療体制～機能分担による地域救急の最適化～」と題し湘南鎌倉病

院の断らない救急への取り組みを紹介。「断る理由を探せばいくらかでもあるが、どうしても受け入れられるかをつねに考えています」と、救急応需姿勢や病院救命士の常勤雇用、周辺医療機関との転院連携など、院内体制の強化から地域連携への発展過程を説明。

第二演題では内田室長が「救急救命士は病院で何ができるのか～湘南鎌倉総合病院における病院救命士の実践～」と題し講演。まず「当院の病院救命士は大きく3つの業務を行っていま

す。病院間搬送やピックアップ搬送といった搬送業務、転院調整や各医療機関からの受け入れ紹介対応などの調整業務、初療介入などの処置業務です」と説明。病院救命士が不在の庄内地域の救急医療従事者に向け、病院と救急隊の連携手法などを共有した。

閉会挨拶で今井聡・事務部長は「湘南鎌倉病院の実績の裏にあるプロセスをうかがい、大変刺激になった。ともに庄内地域の救急医療を発展させていきましょう」と参加者に呼びかけた。

「子ども食堂」の取り組み講演 日本小児科学会で土屋・武蔵野病院副室長

武蔵野徳洲会病院（東京都）の土屋輝幸・栄養管理室副室長（管理栄養士）は、日本小児科学会から依頼を受け、4月17日から3日間、山口県で開催された第129回日本小児科学会学術集会の特別企画で、子ども食堂について講演した。同院は2023年12月に「むさとくこども食堂」をスタート、毎月1回院内で開催している。

土屋副室長は、子どもの貧困率や全国の子ども食堂の利用状況などを概説。同院では栄養バランスや箸の使い方などをテーマとした食育イベントを定期的に開催し、昨年から院内外とのコラボ企画に力を入れていることをアピールした。

具体的にはコラボ先である地域の農園・商店の食材を使用し、同院の小児科医師、歯科医師と連携し各種相談会を実施。また、野菜を豊富に摂れるメニューを考案するなど工夫と改善も重ねてきた。リピーターも増え当初1回に60人ほどだった利用者が、約140人にまで増えた。

保護者へのアンケートでは、参加した子どもの約33%が「好き嫌いが以前より減った」、約66%が「さまざまな食材に関心をもつようになった」など食育の効果が示された。講演後、土屋副室長は「子ども食堂を始めた当初は、これだけ規模が拡大し、小児科学会からお声がけいただくことになるとは夢にも思っていませんでした。今後もチャレンジすることを忘れず、地域住民と病院との境界線を良い意味で曖昧にする活動を大切にしていきたい」と意欲を見せる。



院内外とのコラボなど、子ども食堂の取り組みをアピールした土屋副室長（中央）

湘南鎌倉病院

DMATコーディネーター取得
地域災害拠点病院の体制を強化

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）はDMAT（国の災害派遣医療チーム）コーディネーター資格の取得に力を入れている。同院は2022年7月に県から地域災害拠点病院の指定を受けており、その災害医療体制強化の一環。現在、萬淳史・薬剤部係長が取得し、宮國聡・看護師長ら4人が受講中だ。DMATコーディネーターを拡充することで、災害時の本部機能を支える体制を整える。

DMATは厚生労働省所管で、災害発生時に被災地に赴き、トリアージ（重症度・緊急度選別）、救急対応など医療活動や、活動拠点本部を現地に設置し、消防、警察、自衛隊との連携、薬剤・

機材の調達や情報収集などを担う。DMATコーディネーターは、そのなかでも本部運営や隊員育成を行う。

現在、DMAT隊員約2万人に対し、コーディネーターは約500人、神奈川県内では30人弱しかいない。

コーディネーター取得には統括DMAT研修や災害医療コーディネート研修などを受講する必要がある。

萬係長は「能登半島地震以降、被災によって傾いた医療体制を立て直す本部機能の重要性が増しています。コーディネーターとして、院内のDMAT隊員に情報共有を進め、地域災害拠点病院としての価値を高めていきたい」。宮國・看護師長は「年



「災害拠点病院としての価値を高めていきたい」と萬係長（右）と宮國師長



活動拠点本部で司令塔の役割を務めるDMATコーディネーターの肩章

度内に取得を目指しています。災害拠点病院として、地域の健康と生活を守るよう災害医療の土台を築いていきたい」と意欲的だ。

WEB医療講演スケジュール

Facebook で公開中！

徳洲会グループ病院では、さまざまなテーマで医療講演を開催している。オンラインで受講可能な講演を徳洲会グループのFacebookで公開中。当該病院のホームページで参加方法などを要チェック！

